
 井戸 啓介 (いど けいすけ)



【書名】城の崎にて
 【著者】志賀直哉
 【発行】新潮社（新潮文庫）ほか

瀕死のけがから回復した「自分」が、あと養生のために温泉地で三週間を過ごす。その間、散歩途中などに虫や小動物の死ぬ姿を見て、人間の生と死について考えを巡らす、という内容の私小説です。随筆という感もあります。「生きていることと死んでしまっていることとに差はないような気がする」、「死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでの動騷は恐ろしい」と言う作者の感覚に、まだ若く大手術などを経験したことの無い皆さんはどのような感想を抱くでしょうか。

志賀直哉は「小説の神様」と評され、その簡潔な叙述と巧みな筋立てはしばしば「文章のお手本」とされてきました。その評価に見事にマッチした作品だと思えます。1917年の作品です。

【書名】砂の女
 【著者】安部公房
 【発行】新潮社（新潮文庫）

ノーベル文学賞の有力候補であった著者の代表作にして、世界約30カ国で翻訳されている中編小説です。「昆虫採集に出かけた男が、砂に埋もれていく家に軟禁される羽目になる。男はいろいろな手段で脱出を試みるのだが…」というストーリーで、とても意外な結末が待っています。

息詰まるほどの緊張感にあふれた密度の濃い作品で、1962年という50年以上前の発表ながら、今日発表されたとしても斬新さは失われないでしょう。アヴァンギャルドな安部公房ワールドへの入門としても好適です。また、本書では「男」の心理や行動の記述が圧倒的に多いのですが、タイトルは「砂の女」。そこをなぜかと考えを巡らせることもおもしろいでしょう。

映画化もされており、こちらもアカデミー賞にノミネートされるほどの高評価を受けています。

なお、安部公房の芥川賞受賞作「壁」には、次項の石川淳が「序文」を寄せています。

【書名】紫苑物語

【著者】石川淳

【発行】講談社（講談社文芸文庫）

王朝時代末期を舞台に、2人の男の、対照的な生き様を描いた短編小説です。国の守宗頼は、歌人の血筋に生まれ将来を嘱望されながらその価値観に合点がゆかず、生死で決着をつけることのできる弓の世界に引き寄せられ、生きるスタイルを見いだします。以来、ひたすら「力と力の勝負」を挑んで、意に沿わぬものを次々に容赦なく討ち捨てていきます。さて一方、その領内に住む農民平太は、ただひたすらに、他者と争うことなど考えもせず仏を彫って日々を送っています。そしてこのふたつの人生哲学が衝突したときに、何が起きるか？

屈指のレトリックの使い手である著者一流の引き締まった文章は、暗唱したくなるほどの魅力があります。1956年の作品です。

なお、この作品の新潮文庫版では、次項の福永武彦が解説を書いています。

【書名】廃市

【著者】福永武彦

【発行】新潮社（新潮文庫）

1960年に発表された短編小説です。

大学生の主人公「僕」は、どこか落ち着いた町で卒業論文に取り組もうと考え、つてをたどって堀割が巡る古い水都に1ヶ月滞在します（卒業論文を書くために、大学を離れて落ち着いた町に逗留する、などということがよくあった時代なのですね）。「僕」はこの町の雰囲気や人々の暮らしをととても気に入るのですが、滞在先の家の娘も、その義兄も、この町は廃れていくばかりだと寂しく語ります。その娘と姉、姉の夫である義兄、それぞれには秘密があるようです。そして事件が起こり、そういった秘密があらわになります。と同時に「僕」も、あることに気づいていなかったことを思い知らされます。「僕」は、その町が火事のためにあらかた焼けてしまっていたことを新聞で読み、10年も前のこういった体験を思い出したのです。

福永武彦の諸作品は「人は他人の気持ちをどこまで理解できるのか？」という問題意識に貫かれています。本作でもこのテーマがはっきりとわかりやすく展開されています。

なお、福永武彦は次項で紹介する池澤夏樹の父親でもあります。池澤は「個人選」という形で河出書房新社から「日本文学全集」を刊行しており、「廃市」はそこにも収められています。池澤がどのような理由で福永の作品からこれを選んだのか、気になるところでもあります。

【書名】 スティル・ライフ

【著者】 池澤夏樹

【発行】 中央公論新社（中公文庫）

1988年芥川賞受賞作品。マイペースにアルバイト生活を送る主人公の「ぼく」は、どこか謎めいた同僚の佐々井と親しくなります。そしてある日、佐々井から奇妙な依頼を受けて…。

理知と情緒のバランスがとれた、読後感がさわやかな小説です。みずみずしく透明感にあふれた文体も魅力です。佐々井と「ぼく」の企てがどうなるのか、はらはらしながら楽しむ読み方もできますし、自然の美しさの巧みな描写を味わう読み方もいいでしょう。

なお、2002年の大学入試センター試験では、国語の問題がこの作品から出題されました。

【書名】 わたしを離さないで

【著者】 カズオ・イシグロ（土屋政夫 訳）

【発行】 早川書房（ハヤカワ文庫）

2017年にノーベル文学賞を受賞した著者の、代表作と評される長編小説です。原著が2005年の刊行、2008年にこの文庫版が出版されました。

ストーリーは、主人公が思い出を語る、という形で、やや謎を含んで始まります。「介護人」「提供」とは何なのか、「ヘールシャム」という施設は全寮制の学校のようにだけでも何か違うな、と。しかし、本書はミステリー小説ではないので、そういった謎は100ページあたりで明らかになります。「異様な設定の世界」と言えますが、物語は主人公たちの子ども時代から日常を、友情をベースにして淡々と綴っていきます。最大の山場は第20章から第22章でしょうか。

文庫版の「解説」では、柴田元幸氏が「細部まで抑制が利いていて、入念に構成されていて、かつ我々を仰天させてくれる、きわめて稀有な小説である」と評しています。まったくその通りだと感じました。

【書名】 寺田寅彦随筆集 全5巻

【著者】 寺田寅彦（小宮豊隆 編）

【発行】 岩波書店（岩波文庫）

寺田寅彦は、明治・大正時代の日本を代表する物理学者であり、同時に夏目漱石の教え子・弟子でもありました。いわゆる「理系と文系」（私はこの二分法が好きではありませんが）両方に秀でた存在だったわけです。

そのような背景があつてか、科学的な問題に加えて、日常のふとしたことや趣味的な題材を、冷静な思考と味わいのある文章で綴った随筆が多数残されています。

紹介した岩波文庫は、全5巻ありますが、通して読もうなどと考える必要はないでしょう。適当にページを開き、興味が持てそうな部分に出会えばゆったりとした気分で一緒に考えを巡らせてみる、そのような形で楽しめばよいと思います。(よく知られている「科学者とあたま」は第4巻にあります。)

【書名】 レトリック感覚

【著者】 佐藤信夫

【発行】 講談社 (講談社学術文庫)

文章を読んでいて、ちょっと変わったことばづかいによって興味をそそられる時、そこにレトリックがあるといいます。レトリックは「わざとらしい小手先の技巧」としてマイナスの評価をされる場合が多々あります。その典型的なケースが「物事をそのまま、かざらずに書きなさい」という作文指導です。レトリックとは「事実によけいな虚飾を加える悪者」なのでしょうか。

本書はレトリックを体系的に分類して解説するとともに、そこに創造行為という積極的な評価を与えています。しかし、そういった言語学的事実は脇に置いて大丈夫。本書は「気の利いた名文句集」として、頭を使わなくても引用例を読むだけで楽しめます。1978年の作品。

【書名】 自分の感受性くらい

【著者】 茨木のり子

【発行】 花神社

詩集です。手裏剣のように心に突き刺さってくる切れ味の鋭い言葉、しかし親愛なる人へは愛情にあふれています。

「自分の感受性くらい／自分で守れ／ばかものよ」

【書名】 ネガティブ・ケイパビリティ

【著者】 帚木蓬生

【発行】 朝日新聞出版

帚木蓬生は小説家であり、現役の精神科医師です。世の中では、素早く「正解」を出すという positive capability にばかりが重視されていることに対して、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力 and/or 性急に説明や理由を求めずに、不確実や不思議さ、懐疑の中にいるこ

とができる能力」(これを negative capability と呼ぶ)の重要性・必要性を多面的に説明した著作です。ていねいな記述であり、また著者自身の経験・経歴とも重ねられています。

2017年の出版です。

【書名】私とは何か

【著者】平野啓一郎

【発行】講談社(講談社現代新書)

平野啓一郎は1975年生まれの小説家。大学在学中の年に芥川賞を受賞しています。

われわれはよく、「ありのままの自分でありたい」と考え、「今、ここで行動している自分は本当の自分の姿ではない」などと悩み、「では本当の自分とは何か」と探し求めることに陥ります。これに対して本書は、著者自身が小説を通じて人間を描いていく中で至った一つの考え:「分人」という考え方を提案しています。上記のような苦悩は「それ以上に分割できない『個人』という単位を決めてしてしまっていることから来ている」との考えによります。

章を追って、この「分人」の考え方で「自分自身」「他者との関係」「恋愛と死」などが解釈されていきます。「心理学」とはまったく違ったアプローチによる論述です。また私自身、「心理学」を専門とすることは関係なく、もっと若いうちにこういった考え方に接しておきたかったとも感じており、ご紹介する次第です。

同時に本書では、この考え方を著者が自作の小説にどう活用しているかも述べられています。その点で、彼の小説作品への「ガイドブック」としても役にも立ちます。

2012年初版発行です。

【書名】日本語の作文技術

理科系の作文技術

【著者】本多勝一

木下是雄

【発行】朝日新聞出版(朝日文庫)

中央公論新社(中公新書)

「正確な日本語でレポートを書く」ということに関しては、多数の参考書が出版されていますが、この二作は、それらの中でも「定番書」「必読書」と言えるでしょう。レポートや報告文はどうあるべきかといったことや、句読点の打ち方から修飾語句の並べ方、そしてレポート全体の構成まで、わかりやすく例を挙げて説明されています。大学生になったなら、早いうちに読んでおきたい著作です。著者はそれぞれ新聞記者と物理学者です。